

マフやドーナツ型のニギニギなどの編み物作品は、色鮮やかで思わず手に取りたくなるほどの可愛さです



## 「てあそびマフ」づくりは 心を癒し 地域をつなぐ

日本の高齢者人口は2024年に3,625万人となり、世界でもトップクラスの超高齢社会となりました。近年、高齢者の約8人に一人の割合でかかる病気が認知症です。様々な要因により、脳の神経細胞が壊れたり、弱体化したりすることで認知機能（記憶、判断力など）が低下し、社会生活に支障をきたします。

この認知症の方々が使用する「トゥイドルマフ（認知症マフ）」（以下・マフと表記）をご存じでしょうか。これは、イギリス発祥の筒状の毛糸の編み物。カラフルな色合いで、筒の内と外に可愛い飾り（毛糸玉やぬいぐるみなど）をつけ、片手や両端から中に手を入れて握ったり触ったりすることで、心身の緊張を解きほぐし心に安らぎを与えるものです。認知症の人は思う通りにいかず、焦ったりイライラしたりするなど不安な状態が見られるとのこと。近年、日本国内でワークショップが開催され、マフづくりが全国に広がっています。

昨年6月、熊本県南阿蘇村にマフを手作りし、寄贈をするボランティア団体・『ウィズマフの会』（20名）が発足しました。代表は藤原奈緒美さん。編み物が趣味の藤原さんとマフとの出会いは2年前、ご主人の勤める病院の看護師からマフの製作依頼を受けたことがきっかけです。一人でコツコツ製作し、

いろいろな医療機関や高齢者施設に贈呈しました。

博多で開かれたワークショップに参加した藤原さんは、改めてマフの素晴らしさ、可能性に感激し、高齢化が進む地元阿蘇を中心にマフを

広めようと決意。団体設立で助成金を受けられるようになり、活動に弾みがつきました。

同会のマフは、親しみをもってもらうため「阿蘇」の言葉を入れて、「てあそびマフ」との愛称をつけました。他団体では、「ほっこりマフ」「なごみマフ」などの愛称がつけられ、づくり手の思いが伝わります。

藤原さんは、「編み物をして認知症の人に渡すことが目的でなく、私たち自身が認知症を人ごとせず、我がこととして考え、行動を始めることが大切です。ウィズマフの会をみんなの集いの場として、楽しく無理なく活動を続け、みんなで支え合う地域にしたい」と話します。

同会の活動は、まさに「小さな親切」運動のスローガン“できる親切はみんなでしょう、それが社会の習慣となるように”に通じます。みなさんの活動の輪が大きく広がることを願い、応援しています。



熊本県本部から「小さな親切」実行章を贈呈しました。  
（代表の藤原さんは前列左から2番目）